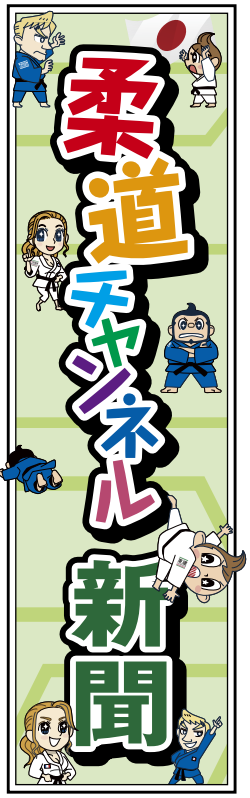
男子100kg超級決勝。延長戦で気迫ある表情で七戸を攻め込む原沢



好調日本、最終日は4個の金獲得

注目の男子超級は原沢が初V

東京・千駄ヶ谷の東京体育館で開催されていた『グランドスラム東京大会』は12月6日に最終日を迎え、男子90kg級、100kg級、100kg超級、女子は78kg級、78kg超級の重量級5階級が行なわれた。

注目の100kg超級は、アスタナ世界選手権準優勝の七戸龍(九州電力)と今年の全日本選手権王者の原沢久喜(日本中央競馬会)の対決となったが、接戦の末、原沢が優勝。リオ五輪代表争いの行方はさらに混沌となってきた。

原沢が七戸との決勝を制し、五輪代表戦線は互角に!?

チェリャビンスク世界選手権、そしてアスタナ世界選手権と2大会連続で準優勝し、男子100kg超級では、世界王者リネール(フランス)に次ぐ実力者の地位を築いている七戸。しかも、チェリャビンスク大会の決勝では、「あわや」というシーンも作り出しており「打倒リネール」最右翼というのが現在の七戸のポジション。

とはいえ、七戸は日本人同士の戦いでことごとく結果を残せておらず、「日本の第一人者」の地位はいまだに築けていない。それだけに、日本のトップ4が顔を揃える今大会で優勝し、第一人者の名を認めさせたいという思いは強かった。

しかし、結果から言うと、七戸は今回も勝つことはできなかった。そして、勝ったのは、今年の全日本選手権王者の原沢。全日本選手権大会のみならず、グランドスラム・チュメニ、グランドスラム・パリをはじめ、昨年11月以降に出場した国際大会すべてで優勝しており、いまや七戸と肩を並べたと言っても過言ではない。

来年のリオ五輪を見据え、絶対に負けられないのは両選手とも一緒。負けた方が代表争いで後れをとることがわかっているだけに、両者の決勝は手に汗握る、緊張感あふれる試合となった。

序盤から厳しい組み手争い。組んでもなかなか技を出すことができず、両者に「指導」が積み上がる。試合時間の5分間はあっという間に終了。その時点で、両者には3つずつの「指導」が入っており、勝敗の行方はゴールデンスコアの延長戦に持ち越されることとなった。

さらに強まる緊迫感のなか、スタートした延長戦。先に引き手をとった原沢が勝負に出る。大内刈りから内股、さらに小内刈りと連続で攻め込めば、主審が、この一連の攻撃のあとに試合を止め、両選手の服装を整えさせると、七戸に「反則負け」の宣告。この瞬間、原沢のグランドスラム東京初優勝が決まった。

▲男子100kg超級の表彰。優勝を争った七戸と原沢に笑顔はなかった

内容としては、大差のないものではあったが、勝つと負けるとでは大違い。この勝利により、原沢がリオ五輪に向け大きな一歩を踏み出したことは間違いない。とはいえ、表彰台では、負けた七戸はもちろんのこと、原沢にも笑顔はなかった。

オリンピックの代表枠はわずか1つのみ。二人の五輪代表争いは、ここからさらに厳しいものになりそうだ。

世界王者の羽賀が完全覚醒。素晴らしい内容で凱旋大会制す

アスタナ世界選手権大会で世界チャンピオンに輝いた男子100kg級の羽賀龍之介(旭化成)が、強豪が多数参加した今大会を安定した内容で制し、世界選手権での優勝が偶然でないことを証明した。

今大会には、2007年リオ大会のコヘア(ブラジル)、2009年ロッテルダム大会のラコフ(カザフスタン)、2011年パリ大会のカブラエフ(ロシア)、2013年リオデジャネイロ大会のママドフ(アゼルバイジャン)、2014年チェリャビンスク大会のクレパレク(チェコ)、そして、今年アスタナ大会の羽賀と世界王者6人。さらに2008年北京五輪王者のツブシンバヤル(モンゴル)を加え、なんと7人の王者が集結。異常なほどのハイレベルな大会となった。

そんな中を、ソツのない、安定した内容で勝ち上がった羽賀。準決勝では今年のワールドマスターズ王者のガシモフ(アゼルバイジャン)を内股で一蹴。

▲100kg級準決勝。羽賀が強豪ガシモフをきれいな内股で一蹴

決勝でも、ほとんど組まずに攻めてくる厄介なチョ・グハン(韓国)に対し、終始

優位に攻めて「指導」1差で勝利。世界選手権優勝以来初となる凱旋大会を、優勝という最高の形で飾って見せた。

100kg級の日本代表として出場した他の3選手が、いずれも3回戦までに姿を消してしまったこともあり、この階級のリオ五輪代表は、羽賀でほぼ確定。

▲100kg級決勝。羽賀はチョに「指導1」差で勝利。初優勝を果たした

昨年は、世界選手権に代表すら派遣されなかった100kg級だけに、羽賀がケガから復帰し覚醒したことは日本にとっては本当に嬉しいニュースと言っていいだろう。来年のオリンピックでは、金メダリスト候補として、日本期待の選手となりそうだ。

世界3位のベイカーが2年ぶり2度目の優勝果たす

男子90kg級には、今夏のアスタナ世界選手権優勝のガク・ドンハン(韓国)、2013年リオデジャネイロ大会優勝のゴンザレス(キューバ)、2010年東京大会、2011年パリ大会優勝のイリアディス(ギリシャ)と、世界王者3人が出場。

2015年世界3位のベイカー茉秋(東海大学3年)、2011年世界2位の西山大希(新日鐵住金)、吉田優也(旭化成)らが、これらの王者にどう立ち向かっていくのかが注目されたが、西山はガク・ドンハンに、そして吉田はゴンザレスに4回戦で敗退。その後、西山は敗者復活戦を勝ち上がり、3位決定戦ではファン・テンド(オランダ)を破って3位入賞を果たした。

持ち味のしぶとさを発揮し、準決勝でガク・ドンハンを延長の末の横四方固めで破ったベイカーは、決勝のゴンザレスとも辛抱強く戦い、結局、指導2対指導1。指導差1で優勝。2年ぶり2度目の優勝を果たした。

2人の世界王者を破ってのベイカーの優勝は見事。絶対的に強いという印象はないが、しっかりと結果を出すのがベイカーのすごいところ。これからリオ五輪に向け、対戦する相手誰もが嫌がるくらい、しぶとい柔道に磨きをかけてほしい。

▲90kg級決勝。ゴンザレスを大内刈りで攻めるベイカー

男子階級別順位表

階級	90kg級	100kg級	100kg超級
優勝	ベイカー 茉秋(東海大学3年)	羽賀 龍之介(旭化成)	原沢 久喜(日本中央競馬会)
準優勝	A.GONZALEZ(キューバ)	G.CHO(韓国)	七戸 龍(九州電力)
3位	西山 大希(新日鐵住金)	C.MARET(フランス)	上川 大樹(京葉ガス)
	D.GWAK(韓国)	E.GASIMOV(アゼルバイジャン)	S.BONDARENKO(ウクライナ)

78kg級世界王者の梅木振るわず 78kg超級で稲森が候補に急浮上

稲森が日本代表の山部、五輪王者のオルティス撃破

女子78kg超級の日本のエース、田地本愛(綜合警備保障「ALSOK」)が負傷欠場。もう一人の世界選手権代表の山部佳苗(ミキハウス)に注目が集まったが、山部は3回戦で、昨年も不覚をとっている稲森奈美(三井住友海上火災保険)に、指導1差で敗退。今回も結果を残すことができなかった。

山部を破った稲森は、準決勝で、身長20cm以上、体重でも30kgは違うと思われるキンゼルスカ(ウクライナ)を小内刈り「有効」からの横四方固めで破る殊勲を見せ、決勝で2012年ロンドン五輪金メダリストのオルティス(キューバ)と対戦することとなった。

オルティスといえば、ここ一番の世界選手権やオリンピックのときと、その他の大会では気合の入り方が違い、強さもその都度違うと言われている選手。今回は、30年にわたりキューバチームをけん引してきたコーチの最後の大会ということで、花道を優勝で飾りたいという思いからか、完全に「本気モード」。開始早々から半端ではない圧力をかけてきた。

▲78kg超級決勝。稲森がオルティスから内股巻き込みで「技有」を奪取

開始早々、オルティスに上四方固めで抑え込まれる絶体絶命のピンチを迎えるも、必死に逃れ9秒で解ける。終了間際、稲森が思い切りのいい内股で「技有」を奪うと、そのまま横四方固めに抑えて「一本」。稲森が本気モードのオルティスに一本勝ちという大殊勲で、大会連覇を達成。来年のリオ五輪代表候補としても急浮上する結果となった。

世界女王の梅木が不振。78kg級は無念のメダリスト0

アスタナ世界選手権で梅木真美(環太平洋大学3年)が優勝を果たし、昨年までの女子78kg級の不振を払拭したと思ったのも束の間。今大会では、元の厳しい状況に逆戻りしてしまった。

この階級の日本代表は、かつて世界2位になった緒方亜香里(了徳寺学園職員)、世界選手権の代表経験を持つ佐藤瑠香(コマツ)、さらに、先月のグランプリ青島でハリソン(アメリカ)とチュメオ(フランス)、二人の世界チャンピンを破って優勝した濵田尚里(自衛隊体育学校)などで、昨年は佐藤が2位、濵田が3位に入っており、メダルに期待がかかった。

しかし、実際にフタを開けてみると、緒方は2回戦のギボンズ(イギリス)に大外刈りと袈裟固めの合わせ技で一本負け。濵田も3回戦のスティーンフィス(オランダ)に出足払いで完敗。佐藤と梅木は準決勝に駒を進めたものの、佐藤はスティーンフィスに大内刈りで「有効」を取られて決勝進出ならず。梅木も五輪王者のハリソンに、柔道をさせてもらえずに苦杯を喫した。

▲78kg級準決勝。梅木はロンドン五輪金のハリソンにペースを握られて無念の敗退

佐藤と梅木は3位決定戦に回るも、佐藤はキボンズに、そして梅木はIJF柔道世界ランキング3位のベレンセク(スロベニア)に敗れ、結局、日本はこの階級メダル「0」に終わり、大きな課題を残すこととなった。

女子階級別順位表

階級	78kg級	78kg超級
優勝	K.HARRISON(アメリカ)	稲森 奈見(三井住友海上)
準優勝	G.STEENHUIS(オランダ)	I.ORTIZ(キューバ)
3位	G.GIBBONS(イギリス)	I.KINDZERSKA(ウクライナ)
	A.VELENSEK(スロベニア)	E.ANDEOL(フランス)